竹島俊之先輩の想い出

浮田　三郎

私がギリシア留学から帰国してしばらく経ったころ、関本先生が何かギリシア関係の連絡会のようなものを作りたいねと言われたとき、私もそうですねとは言ったものの、どんなものができるかなと思っていました。そして、１年以上が過ぎたころ、現代ギリシア語、古典ギリシア語、何らかの形で関本先生に関係のある何人かの同士が集い、ギリシア語ギリシア文学研究会を立ち上げることができました。そこで、この研究会のニックネームは、ギリ研と呼ばれたものでした。その時の様子は、依然にも書いたような気がします。

竹島先輩は当然その中の中心的な人物の一人でした。このプロピレアの雑誌名も竹島先輩の案が採用されたものです。私は、大学院で現代ギリシア語を中心に研究を進めることにしましたが、竹島先輩は、古典ギリシア語の研究をすることにしたということを聞いたことがあります。

そんなこともあってでしょうか、彼と私の関係はかなり微妙なものだったような気がします。そうして、私は彼の格好の標的になっていたような気がします。本学会の準備や懇親会の後の少数の二・三次会は、彼にとっても私にとっても楽しいひとときでした。彼は、特に一杯入ると、弁の調子が上がり、なかなか他の追従を許さないといった調子でした。他の先輩達はこれを竹島節と呼んでいましたが、そんな弁説を耳にしながら、これが本当のシンポシオンかもしれないと思いながら、結構沢山飲んだものです。彼も私も、結構飲みました。そして、彼の調子が上がれば上がるほど、益々私は彼のサンドボックスとなったものでした。

もう１５年以上も前になるでしょうか、私は、ブラジルのサンパウロ大学に客員教授として、広島を１年空けなければならなくなり、当学会に迷惑を掛けることになったのですが、ブラジルから帰ってそれを詫びたとき、関本先生が

「竹島君が随分とやってくれてね」と言われたことを思い出します。事務局を私の研究室に置いていたので、いくつかの困難もあったと思いますが、その１年間は、連絡や事務的なことも中心的に処理されていたのです。

その１年間を除けば、毎年何回か学会の準備や運営委員会で一緒に仕事をし、また、竹島節を聞きに街へ出かけたものです。私も、この歳になると、だんだん頑固になり、少しは彼の意見に反論し出しました。ただ、ギリシア語に関する話では、一方では古典他方は現代でなかなか噛み合わないことが多かったような気がしますが、近年、よく言語教育に関して竹島論を説くようになられました。彼は、大学では、ドイツ語と古典ギリシア語を講じていたのですが、ドイツ語もギリシア語もあるいくつかの構文を覚えれば、後は簡単だと論じるのです。こんな時、私は反論しました。まあ、でも、竹島さんのような秀才にはそうなのかも知れないと思ったものです。

あれやこれや、時に叱られ、時に肩を叩かれ、たまには誉められたこともあるような、そんな想い出。時にギリシアを語り合い、時に共に飲んで歌った「琵琶湖周航の歌」。ひょっとすると、今は、エーゲ海一周かな。

青空に　ミモザお供の　プロピレア

晴天の　高みに歌う　ひばりかな